拂はれる。オー美はしき死の靈よ!! 山海幾百里を離れた西南の暖國、其處は君の里であり、生前君を知れる多くの人は集つてゐるそして君の墳墓を見守つてゐてくれるのだ。斯ふした人々によつて手向けらるゝ新らしい香花は、そは君の靈の永遠をつなぐ、何よりの贈り物でなくて何であらう。終りに君の靈を祈りて又歐はん。

白砂青松の玖島潟は
親しき君の靈を抱き
千枝に榮へ行く綠り葉は
亡き君の名をぞ傳ふらめ
幸と榮へに眠る君か
手向けに薫る君のおくつきか
思へ自然のめぐみぞ
泣けよ永生の理りよ
落ちて朽ち行く秋の葉に
緣したづぬる由よりも
君を思ひ君の靈祈る
身のなさけにやいと深しは
人の心の殊勝かや

棲神閣に詣で

照月

聖誕茲に七百年
善惡諸人共どもに
靈に生きるの紀念ぞよ
津々浦々の道の友
功積み德を累ねんと
吾も人もと誘ひつゝ
靈跡めぐりて參拜し
身延の山にいそぎ行く
いたむ足身も厭はせで
勇氣はげます尊さよ
祖師の弘宣は末法に
久遠の慈悲と流れ來て
闇路を照すその効は
至らぬ所無かりける
毒氣になやめる人々は
闇に闇にと迷ひ入り
出づることなきあはれさよ
十界皆成の法華經は

順逆無別の理ぞ
來れ人々法華經に
吾は佛に護られて
行きてそれらを救ふべし
七字の光明いやまさる

理智の母

太田赤童

美と榮光にときめく自然に
瀾熳と花が咲いた
小鳥が來て甘い美しい夢を見た
人々は喜びに滿ちて躍つて居るうちに
かすかな音をたてゝ
地上に花は散つた
小鳥は歌舞の醉から醒めたのに
人々は笑ひ續けた
藝術家は獨り泣いた。

生育と躍動にひらめく自然に
爛々たる灼熱に生あるものゝ凡てが
力一ぱいに生きてゐる
草も木も水も山も蟲も鳥も
人々は宵の色彩と燈火に親んだ
蒼穹に輝く星と月との神秘を
人々はだまつて見てゐた
哲學者は獨り考へた。

透徹と靜寂にしづみゆく自然に
玲瓏の感じ深まりゆくとき
凋落と孤獨が地上に來た、
人々は落膽と失望とに
輕い溜め息をついた
苦痛の叫びも絶えて凡てが死に歸つた、
宗教家はだまつて見てゐた。

荒莫と廢殘にさすらう自然に
萬有はしづかに眠つてる
創造と試みにつかれたやうに
——煩悶——燋燥——
人々は自滅の投影をみつめて
暗黑と恐怖とを呪ふた